慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『玉葉集』における「心の底」
Sub Title	
Author	山根, 秋乃(Yamane, Akino)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1988
Jtitle	三田國文 No.10 (1988. 12) ,p.53- 65
JaLC DOI	10.14991/002.19881200-0053
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19881200-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〔研究ノート〕

『玉葉集』における「心の底」

山根秋乃

一

『玉葉集』『風雅集』を代表とする京極派和歌は、近年歌壇史の側面から、また詠法や歌風におよんでその研究は進展しつつある。

そのうち京極派和歌の用語については、古く佐々木治綱博士が『伏見院御製の研究』『永福門院』において、伏見院と永福門院の好んで用いるいくつかの語を指摘されている。[1] また岩佐美代子氏は、国歌大観による検索から、五句各々の句における京極派和歌の表現の特異性[2]ということを示された。さらに近年では、叙景歌を中心として歌題や語彙の面から鹿目俊彦氏[3]、岩松研吉郎氏[4]等が、詠出方法から歌風におよんで京極派和歌の特性を示されるなど、その研究の成果は徐々につみ重ねられつつある。

これら先学の研究成果を基盤として、ここでは、「心の底」という言葉に注目し、特に『玉葉集』[5]での詠作方法とその意味を中心として考えてみたい。

『玉葉集』の中には「心の底」を含む歌として、次の七首が見い出される。(詞書は省略する)

しられずも心のそこや春になる時なる比と花のまたるる
　　伏見院（巻一・春上・一二八）

つひにかかるうさにもならばなにかわがおもふ心のそこをみせけん
　　教良女（巻十一・恋三・一五三三）

人はしらじ心のそこのあはれのみなぐさめがたくなりまさる比
　　伏見院（同右・一五五八）

おもはじと思ふばかりはかなはねば心のそこよおもはれずなれ
　　遊義門院（同右・一五八五）

うきをうしといはぬよりまづさきだちて心のそこをしる涙かな
　　朔平門院（同右・一七八九）

ながむれば心のそこぞすみまさる三井のし水にうつる月かげ
　　道珍（巻十九・釈教・二六九〇）

いはし水ながれの末のさかゆるは心のそこのすめるゆゑかも
　　後深草院（巻二十・神祇・二七六四）

これら七首のうち釈教と神祇の二首を除いた五首は、いわば純京極派歌人[6]といえる人々に占められている。またその歌風には—恋歌の四首に明らかであるが—福田秀一氏の整理[7]された「叙景と抒情をよく分離し抒情歌は感情の観照に徹している」という京極派の特性がよくあらわれている。以上のことから、これら「心の底」を含んで成立している歌が、『玉葉集』および京極派の歌として特徴があり、さらにその用語自身にも特色が見い出されるのではないか、という予測に立ち、以下考察を試みるものである。

二

まず「心の底」という言葉が、『玉葉集』以前の勅撰集（以下特にことわらない限り本稿中の勅撰集とは、この意味に用いる）の中に数量的にはどのようにあらわれているかをみれば、次のようになる。

古今〜金葉0[8]／千載2／新古今1／新勅撰1／続後撰1／続拾遺1／新後撰1／玉葉7

「心の底」が勅撰集では『千載集』にはじめて登場し、それ以降わずかに一首づつその歌がのせられ、『玉葉集』で一挙に七首という数になることがわかる。『玉葉集』が勅撰集中で最大の歌数（二八〇〇首）を有することを考慮しても、なおこの言葉が『玉葉集』に特に多くあらわれていることは認めてよいことと思われる。

では、なぜ「心の底」が『玉葉集』京極派の歌に多くあらわれるのか。

これを歌そのものから、またその用語法にわたり、分析し計量する方法を出発点として考えてみたい。（但し、この計量の意味は、あくまで傾向を知るための目安としてのものである。データーの取り方は、計量国語学におけるような厳密厳正な定義に出発していない）

そこで最初に用語の偏向について考えたい。すなわち「心の〜」という型の用語が、『玉葉集』の中で特に好まれているのかどうかということを調べてみる。「心の〜」型用語に対する『玉葉集』での嗜好性を調査するのである。

そのため総索引[9]を用いて勅撰集の「心の〜」型用語を調べ、表示してみた。（表1）これによって、どの勅撰集がどのような「心の〜」型の用語をよく用いているのかがわかるわけである。

『玉葉集』の用語の総数三五は、勅撰集で最も数が多いが、総歌数との比率でこれを比べれば、それほど高くはなくなる。『玉葉集』が一・三パーセント『新後撰集』が一・九パーセントで、『玉葉集』は『新後撰集』を下まわっている。すなわち『玉葉集』が「心の〜」という型の用語を特に好んで用いている訳ではないことが知られるのである。また、「心の底」の『玉葉集』での用例数七が、この表の中で目立って多いことも確認される。

三

『玉葉集』の「心の底」が、単に「心の〜」型用語の好みという点からとらえられないとすれば、次にこの言葉の意味用法の面からの調査が必要となる。

そこで、比較の対象として勅撰集の「心の底」の歌—先に数のみを示しておいた—をとりあげてみたい。

あかつきのあらしにたぐふかねのおとを心のそこにこたへてぞ

〔表Ⅰ〕 勅撰集における「心の～」型用語

	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今	新勅撰	続後撰	続古今	続拾遺	新後撰	玉葉	備考
あき	2	1		1				1	2	1			2	1	
あきかぜ												1			
あさねがみ											1				
いけ		1													
いはき									1						
いろ		1					1	1	3	2	7	1	4	3	
うき											1				
うきぬなは										1					
うち	1	2	3	5	1	1	7	1	5	4	6	7	5	3	万葉集12
うら	1														
おく								2		1	1	1		1	
かぎり								3		1					
かたいと										1					
くま		2		1											
くも										1					
くもま												1			
くるしさ													1		
すぎ								1							
すぢ														1	
すゑ											1	1	2	4	末の世 末の松山を含む
そこ							2	1	1		1	1	1	7	
そら			1	1				4	1		1	1	1	1	
たき											1				
たま														2	
ちり					1			1			1				
つき						1		1		3	1		2	1	
つゆ			1												
ときはやま										1					
とも													1	1	
なぐさめ													1		
はて							1	1				1		1	
はな	1	1						2	3				1		
はる														1	
ひま						1		1					1		
ほか				1				2			2		3		
ほど		1			1		3	1		1		1	2	5	
まつ			1	1											
みづ						1	1	1	1	1	1		1		
やみ	1			1	1		2	1	1	2	3	1	2	3	
ゆめ										1					
計 (A)	6	9	6	11	4	4	17	25	18	21	28	17	30	35	
総歌数(B)	1,100	1,425	1,351	1,218	985	415	1,288	1,978	1,374	1,371	1,915	1,459	1,607	2,800	新編国歌大観による
$\frac{A}{B}\times 100$	0.5 (%)	0.6	0.4	0.9	0.4	1.0	1.3	1.3	1.4	1.5	1.5	1.2	1.9	1.3	

きく　　西行（『千載集』巻十七・雑・一一四九）
きよくすむ心のそこをかがみにてやがてぞうつる色もすがたも
　　俊秀法師（同巻十七・釈教・一二五〇）
なれしあきのふけしよどこはそれながら心のそこの夢ぞかなしき
　　実家（『新古今集』巻八・哀傷・七九二）
しるひとやそらになからむおもふなる心のそこのこころならでは
　　本院侍従（『新勅撰集』巻十一・恋一・六四〇）
みくさゐる板井の清水としふりて心の底をくむ人ぞなき
　　良経（『続後撰集』巻十三・恋三・一二〇五）
くもりなく心のそこもうつるらんもとよりきよき法のかがみは
　　法印覚源（『続拾遺集』巻十九・釈教・一三七六）
げに思ふ心の底の知られねば契るまゝにもえやは頼まむ
　　俊光（『新後撰集』巻十三・恋三・九七二）

これら勅撰集の「心の底」の歌には、一読して明らかな特徴をみてとることができる。それはこれらの歌のほとんどが「底」の縁語関係によって仕立てられていることである。ここから、勅撰集中での「底」という言葉が、修辞的にこれらの和歌詠作上のキーワードともなっているであろうことを予測し、次にこの「底」という言葉を取りあげて調査してみたい。

「底」を総索引によって調べ、その歌を語形に基準を置きA～Fのように分類してみた。(10)（表Ⅱ）

A　～の底（池・水・海の底等）型用語
B　底の～（底のみくず・もくず・玉藻等）型用語
C　底に映る（見る・沈む・やどる等）型用語
D　底澄む（きよむ・にほふ・あらは等）型用語
E　「そこの心」以外の懸語の「そこ」
F　物名

語形を分類の基準としたが、調査の主たる目的は「底」という言葉の修辞的特性や偏向をみることにある。

各勅撰集の「底」の例歌数は、印象としてそう多くはない。そして、その分類からわかることは、「底」が、予想されたごとく、用法において非常に限定的なことである。各句の型では、A、Bに最も明らかにあらわれるところであるが、「底」は水の縁を離れずにそのほとんどが用いられている。また、C、Dも「(水の)底に映る」「(水の)底澄む」ということであり、言うまでもなく水にかかわっている。Eの懸詞に関しても、歌全体の中で水をかかわらせて用いることは他と同様である。また、「底」を含む歌に、釈教や神祇歌の多いことも、やはりこの水の縁語関係から説明できるようである。〃法の水〃という言葉の〃水〃の縁語としての〃底〃がそれである。釈教・神祇歌で「鏡」や「月」という言葉が頻繁に用いられるのも、底―澄む―月・鏡という関連によっていることも理解される。

さらに「底」の用法の中で、万葉以来のより古風な形としては、BとEに表示した「そこ」の懸詞としての用い方が存在する。

こうした「底」の歌の歴史の中から、千載・新古今時代にいたってはじめて「心の底」は歌語として勅撰集に登場してくることになる。

表Ⅰからも理解されるところであるが、千載・新古今ごろの歌語の増加、多様化の時代にあたって「心の底」をはじめとして「霞の底」「雪の底」などのようなそれまでの勅撰集にはみられなかった

〔表Ⅱ〕 勅撰集における「底」

		古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今	新勅撰	続後撰	続古今	続拾遺	新後撰	玉葉
A（～の底）	海川水等の	1	4	5	1	2			4		2	2		1	1
	月			2											
	鏡										1			1	
	雲・霞・露・雪							2	1	1				1	2
	谷							1		1					
	心							2	1	1		1		1	7
	涙							1		1					
	恨														1
B（底なるの～）	みくず，玉も	1	4	4	1	2		2	1		1	2			2
	（そこの）懸詞				1	1						1		1	1
C（底に～）	映る，沈む，やどる，みる	2	1	2	1	1	1	2	1		1	1			3
D（底～）	きよみ，すむ，にほふ，あらは	1		1	1	1	1	1	2	1	3	2			
E	懸詞		2					1					4		
F	物名	1		2											
	計	6	11	16	5	7	2	12	10	5	8	9	4	5	17

＊みなゝこ，わたの底を含まず

「底」用語が続々として登場してくる。こうした風潮の中で「心の底」という言葉も、この時期にほぼ流行的に用いられたであろうことは、私撰集、私家集でのその用例数と作者の顔ぶれによって確認することができる。それは、左の如くである。(11)

。私撰集

玄玉集1（公衡）／新撰六帖1（為家）／夫木抄4（定家2・光俊1・西行1）

。私家集

朝忠1／右京大夫1／西行2／良経4

慈円19／定家6／式子内親王1

朝忠集中の一首――朝忠との贈答歌で『新勅撰集』所収の本院侍従の歌――と為家の歌を除けば、ほぼすべてがいわゆる新風期の作者の歌といってよいであろう。

それでは、この新風期における「心の底」の意味用法が、玉葉集京極派におけるそれと同じであるのかどうか。例歌の多い私家集の歌から考えてみたい。

定歌の六首を掲げてみる。

神風やみもすそ河にいのりおきし心の底やにごらざりけん／述懐／関白左大臣家百首　（拾遺愚草・一四九一）

我がたのむ心の底をてらしみよみもす

そ川にやどる月影／雑／院五十首　（同・一八二六）
諸人の心の底もにごらじな夕にすめる河浪のこゑ／暮聞河浪／本宮にて又講ぜられ侍りし　（同・二九一六）
夏の夜はうき暁の雲もなし心の底に月はのこりて／夏／一字百首　（拾遺愚草員外・三一）
をしのゐるこほりのひまに風さえて心の底ぞまづはくだくる／冬／同右　（同・六〇）
世のうさもはなれておつる滝のおとに心の底もいまぞすみぬる／閑居十首／更無俗物当人眼、但有泉声洗我心（同・四七五）

これらの歌にあらわれているように、歌の「底」による縁語的な仕立て方は圧倒的である。ことに「拾遺愚草」の三首は、三首ともに神祇歌であり、底―澄む（にごらじ）―月影で形成されている。「員外」の歌は、二首が四季歌と閑居の歌で、新しい趣向をみてとることができるが、それでもなお、月（三一）滝・澄む（四七五）というように言葉のよせをはなれない。ところが、こうした歌の中で、「員外」中の六十番の歌には、「底」による直接の縁語が見出せない。（氷―くだくるの縁語関係の仕立て）この、「心の底」は、では、どのような意味用法によるものか。このことを少し問題にしたい。

定家以上に「心の底」を用いた歌の多い慈円に、「底」の縁語関係を見い出せない、このような歌をさがすと、次の五首を取り出すことができる。

ねざめする心の底のわりなきにこたへてもなくをしの声かな／冬・水鳥／楚忽第一百首　（同・七六五）
わび人の心の底（イ空）にこたふなりをのへの方のまつ風のおと／山家かきくもる心の底に雲とぢて時雨をうづむゆふ暮の空／夕聞時雨　（拾玉集・九七九）
ひとをおもふ心の底はよしの山おくよりおくのいはのかけ路／深／百首題　（同・四一五六）
こよひかも心の底にまちし秋は山のはにだに雲のなきかな／建久四年九月十三日左将軍幕下にたてまつる　（同・四五三八）

歌題に「月」や「深」といった「底」の縁語のあることや本文の揺れはさしあたり問題にしない。これらの歌に共通する「心の底」の用い方、その内容が問題となる。

そこで改めてこれらの歌を見渡せば、ある共通する要素に気づかされる。それは五首すべてに含まれる叙景的な要素である。

こたへてもなくをしの声かな　（七六五）
をのへの方のまつ風の音　（九七九）
ゆふ暮の空　（四一五六）
よしの山おくよりおくのいはのかけ路　（四五三八）
山のはにだに雲のなきかな　（五三六〇）

五首に共通する叙景的要素が、「底」に対する言葉として重要である。これらの歌から作者の視線ないし、聴覚がどこにすえられているかを考えれば、それは「底」に対置される上空や、それに近い山、雲ということになる。「心の底」の新風期でのもう一つの用法がここには見い出されると思われる。ここでの「底」は縁語の関係からでなく、一首を立体的に構成するために用いられている。つまり叙景に対して「底」という語の生み出す空間的立体的効果のために好んで用いられているということができるのである。

さらにこの「底」の意味を考えれば、慈円の四五三八番の歌がそれに対して示唆的である。この歌は、新風期の「心の底」の意味の一面を説明しているともいえないだろうか。「心の底」は「よしの山のおくよりおくのいはのかけ路」[12]ということからわかるように「底」は「(よしの)山のおくのおく」という表現に対応するものとなっている。ここで考えられている「底」は、慈円の他の四首の「底」の垂直性に対して水平的な「底」であるともいえよう。「底」という言葉が、この時期必ずしも我々の直感する垂直方向の最低位の意に用いられていないことがわかるのである。また、この期に新しく用いられた「底」の用語である「雲の底」「霞の底」などという表現も、「底」が物理的に厳密に垂直的な底の意に用いられてはいないことのあかしとなろう。

すなわち、千載・新古今時代に勅撰集に登場し、歌人達に用いられた「心の底」は、心の最深部・最低部というこの言葉の持つ厳密な意味あいの必要性から用いられたというよりも、その生み出す修辞的効果のため、つまり「心」と「底」を結びつけて一首中に生じる、修辞的な、いわゆる新風的な[13]効果を生み出すために用いられた、ととらえてよいと思われるのである。

それに対して『玉葉集』では、述べてきたように「底」の縁語的用法で歌を形成しない。また新風期の叙景的要素と関連させた「底」の用い方でもない。

結局、「底」という言葉の先行例[14]の中から『玉葉集』での「心の底」の用法はとらえきることができなかったということになる。

四

「底」の歌の先行例ではとらえられなかった京極派の「心の底」を、それでは「心」という言葉から照射すればどのようになるだろうか。

「底」における調査とほぼ同様のことを、「心」においても行ってみる。ただし、「心」の用例の非常な多さから、『玉葉集』京極派の「心の底」が主として恋部に表われていることを考慮し、各勅撰集の恋部における「心」を調査することとする。

調査のための前提には、京極派の歌の特性—叙景と抒情を分離すること—をすえ、抒情歌が景物を離れてうたわれることに着目する。「心」を用いた歌を具象性の強いものと、抽象性の強いものとでえり分けてみるのである。具体的には、「心」を用いた歌の、一首中における名詞を調査する。「心」と「人」(恋歌での頻出語で、類別に際してはそれほど問題とならない言葉と考えられる)を除いた一首中の名詞によって、具象語の歌と抽象語の歌に分けてみるのである。「心」と「人」以外に具象名詞が一語でもあれば、その具象語のいづれかにその一首を所属させ、「心」「人」以外に一つの具象名詞も持たないものは、抽象名詞の歌として抽象名詞のいづれかに分類[15]する、という方法である。表にはⅢ—2に具象名詞、Ⅲ—3に抽象名詞の各語を示し、表Ⅲ—1にそれらの合計数をまとめ、対比した。

「心」を用いた歌のうち、心情心理詠に抽象性が強いという特色のある[16]京極派恋歌に近似するものと相違するものとをこれによってさぐろうとするのである。

〔表Ⅲ-1〕 心を含む歌の名詞による分類（恋部のみ）

	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今	新勅撰	続後撰	続古今	続拾遺	新後撰	玉葉
「心」を含む歌数(A)	53	57	55	29	15	15	61	56	51	53	95	56	70	102
具象名詞による歌	48	49	40	23	14	12	48	51	45	47	78	51	52	72
抽象名詞による歌(B)	5	8	15	6	1	3	13	5	6	6	17	6	19	30
抽象名詞による歌の割合 $\frac{B}{A}\times100$	9.4 (%)	14.0	27.2	20.7	6.7	20.0	7.9	8.9	11.8	11.3	17.9	10.7	27.1	29.4

表Ⅲ—1によって抽象名詞による歌の比率をみれば、それが『玉葉集』において高い率を示すことが確認され、概略的ながら、『玉葉集』では「心」を用いた歌が、他の勅撰集に比べてより抽象的に形成されるということが数値の上からも理解される。（他に『玉葉集』についで高率を示すものとして『新後撰集』と『拾遺集』恋部があげられるが、これについては後述する。）

『玉葉集』恋部での「心」の用法を確認したところで、さらに表のⅢ—2、Ⅲ—3から「心」という言葉の和歌の世界での用いられ方を考えてみたい。「心」が和歌の中でどのような言葉とともに多く用いられ、修辞的にはどのような用法を持つ言葉であるのかを調べてみるのである。

具象語による歌（表Ⅲ—2）と抽象語による歌（表Ⅲ—3）との二種類の表からとらえられることは、「心」とともに用いられる言葉の種類の多さと、その数値にみられるかたよりの少なさである。そこには「心」の歌語としての性格がよくあらわされていると思われる。先に調査した「底」という言葉とは対照的に「心」は歌語としてはきわめて自由な、言いかえれば、無性格とでもいってよい言葉ととらえられるようである。それ自身では他の語に影響をおよぼすことの少ない、いわば無色の言葉として歌の中に存在し、そのために、句の形で他の言葉と結合することによって（例えば「心の秋」「心の色」「心の空」など）はじめてより強い個性をあらわす言葉となるのである。伝統的、修辞的な表現としては「心をやる」「心をおく」「心をつくす」など—古代信仰的な、魂（たま）に近い心の用法—があるが、その規範性は勅撰集の中ではごく弱いものである。[17] すなわち「心」は、それ自身では強力な歌語的伝統や、規範性を持たない言葉と考えられるのである。

それでは、京極派における「心の底」はどのように考えたらよいか。「底」の伝統的修辞法にもよらず、「心」の歌語としての修辞法はもとから希薄であるとすれば、どのような理由で「心の底」が、京極派に特に多く用いられるようになったのか。

ここで、もう一度表Ⅲ—1にたち返りたい。『玉葉集』京極派の恋歌が、他の勅撰集との比較から抽象語を主体として抽象的に仕立てられることが多いことは表によって理解されたが、その抽象性を示す数字が『玉葉集』に近いものとして『拾遺集』と『新後撰集』恋部が見いだされた。このうち『新後撰集』の歌には、為兼の歌が入集しており、他にも京極派和歌の影響があるかと思われる歌人のものの含まれていることを考慮して、ここでは、時代が離れ、かつ[18]

〔表III-2〕 具象名詞による歌

	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今	新勅撰	続後撰	続古今	続拾遺	新後撰	玉葉	備考
歌枕	5	8	6	3	2	1	3	4	6	8	7	5	5	3	
水	6	6	4	1	2	1	3	8	3	8	14	2	4	3	
山・煙・田・道	4	1	1	1			3	3	1	4	1	4	1	2	
衣・袖	1	4		3			4	2	4		5	4	3	3	
天象	9	7	6	3	3	2	4	11	9	4	11	3	4	7	
植物・色	9	8	6	4	2	1	6	7	12	4	15	8	10	5	
四季		1	2				1			1					
弓・太刀	1		3				1		1	1			1		
宿・床・すだれ				1			1	1				2		1	
虫・鳥	2	4	1					4	1	2	3		2	1	
鏡							1			1					
涙	1	2			1	2	5	3	1	4	7	4	3	3	
夢	2	3	2					1	1	2		7	1	7	
顔・眉・髪・姿			2		1		2				1			1	
うら（占）	1								1						
ふるさと	1														
便り，ふみ，ふで	1	1									1			9	ことのはを含む
人目				1			1	1			1				
妻														1	
身・命	2	1	1	1	1	2	6	5	4	6	9	6	8	10	
形身・面かげ	1	1	1	1								2		2	
世		2	2	1		1	3			2	2		2	7	
神			2		1	1	1		1					1	
年月・昔	2		1	1								2	3		いにしへを含む
夜・暮・宵・闇				2	1	1	3	1			1	2	3	2	
ね（音）													1		
底													1	4	
計	48	49	40	23	14	12	48	51	45	47	78	51	52	72	

〔表III-3〕 抽象名詞による歌

	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今	新勅撰	続後撰	続古今	続拾遺	新撰後	玉葉
「心」「人」以外に名詞をもたないうた	1	2	4	1			3	1	2	2	3	4	3	2
いづち・いづれ	1		2			1	1							
おもひ	1	1								1	1		1	2
もの，こと	2		2	1		1	2				1			
われ，きみ		2	5	1			3						2	3
とき		1	1											2
けふ，けさ		1		1					1					3
ほど			1											2
つらさ				1					1	1	4	1	1	1
かた（方）				1				1			1			1
いま，のち						1				1			2	4
さき							1							
うへ							1							
これ							1							
なさけ								1			1			2
うたがひ								1						
かたとき									1					
あだ										1				
いつはり											1		4	
ひかず											1			
よそ											1			2
する，ゆくする											1	1	2	2
なに，たれ											2			
たのみ													1	1
ひとたび													1	
ふたつ														1
こひしさ														1
ながめ								1	1					1
な（名）		1			1		1						2	
計	5	8	15	6	1	3	13	5	6	6	17	6	19	30

「心」の歌に特色の見られる『拾遺集』恋部の歌を問題としてとりあげたい。

『拾遺集』巻十五恋歌五には一九四二～一九四九まで、題しらず読人しらずの歌群として「心」を含み抽象的な用法ばかりで仕立てられた、いわば「心」歌群とでもいうべき一群の歌が存在する。それは次のようなものである。

限りなく思ふ心のふかければつらきもしらぬものにぞありける　（九四二）
わりなしやしひてもたのむ心かなつらしとかつは思ふものから　（九四三）
うしと思ふものから人のこひしきはいづこをしのぶ心なるらん　（九四四）
身のうきを人のつらきと思ふこそ我ともいはじわりなかりけれ　（九四五）
つらしとは思ふものからこひしきは我にかなはぬ心なりけり　（九四六）
つらきをも思ひしるやはわがためにつらき人しも我をうらむる　（九四七）
心をばつらき物ぞといひおきてかはらじと思ふかほぞこひしき　（九四八）
あさましや見しかとだにもおもはぬにかはらぬかほぞ心ならまし　（九四九）

この歌群における「心」と『玉葉集』京極派での「心」とを比較してみる。

いつをいかに待ち見よとだにちぎらぬにたのむる心さもぞつれなき　為子（一三〇七）
まつことの心にすすむけふの日はくれじとすれやあまり久しき　為兼（一三八一）
ときのまもわれに心のいかがなるとただ常にこそとはまほしけれ　同（一五〇二）
人やかはるわが心にやたのみまさるはかなき事もただ常にうき　永福門院（一六七二）
おのづからしばしはかかるなさけもやと心に待ちし程もすぎぬる　院中納言典侍（一七六二）

比較のため抽象語との組みあわせのものから選んだが、これらの京極派の歌と『拾遺集』の歌との差異がどこにあろうか。

「心」という言葉のみに注目した比較では不明瞭な相違が、一首全体の構成の面から、またその歌の集合を比較することで明らかになってくる。

『拾遺集』歌と『玉葉集』歌の相異は、一首の中に流れる〝時間〟である。

京極派の抽象的といわれる恋歌の中には、明らかに時間の推移をよみとることができるようである。それは詠者の心の中に移ろってゆくとき、そういう意味の時間の推移である。

「心にすすむ」「久しき」　（一三八一）
「ときのま」「つねに」　（一五〇二）
「たのみまさる」「常にうき」　（一六七三）
「しばしはかはる」「心に待ちし程」　（一七六二）
「さらに心のみだるる」　（一八〇八）

これらの表現の語るところは、一首の中での〝心の移ろい〟であり、

それにともなう時間の推移である。これらの歌は、勅撰集恋部の時間（初恋→忍恋→会恋→待恋→絶恋→恨恋）の中に配置されて、さらにもうひとつの時間秩序の世界を作り上げているのである。それに対して、『拾遺集』恋部の歌は、配列の中での時間のわくを持つばかりである。

かくして、『玉葉集』恋部は京極派和歌を中心として、大きな時間の枠の中に、更に細かい時間の枠を持つことによる独自の恋歌の世界を作り上げた、といえるのだが、では、その京極派の用いた「心の底」という言葉のあらわすものは一体何か。

一人の「心」の世界が、時間の推移にともなう心理の変化のなかでうたわれるとき、その時間と心理の移行に並行して「心」にもいくつかのレベルが生じる。「心のうち」「心のほど」「心のすゑ」等々、『玉葉集』のいくつかの「心の～」型用語（表1参照）がそれをあらわしている。そうした心の状態の移ろいの中で、時間が最も経過した時、その折の心情や心理の存在する心の位置、そこに「心の底」がたち現われてくるのである。

それは逆に言えば、「心」を位置のあるものとしてとらえたということである。つまり「底」の存在する「心」の把握である。

それまで、勅撰集の中で「心をやる」「心をつくす」等の古風な表現としてあらわれるか、他の語との組みあわせによって修辞的な特性を発揮するほかには、ぼんやりと「こころ」であった「心」は、京極派歌人によって、ようやく抽象的に「心」としてとらえ直されたといえるのである。そこで、「心の底」は我々の直接に感じるところ――表面にはあらわれない、心の真実のやどる、心の最低部・最深奥部――といった意味となる。現在の我々にとっては、何でもないあたり前の言葉に映る「心の底」が勅撰集の歌語としては、『玉葉集』においてはじめて、以上のような意味においてはっきりと用いられたのだということになる。

これを京極派和歌にいわれる凝視[19]ということに関連してとらえるならば「凝視＝対象の分節＝多元化」とする岩松研吉郎氏の説[20]が参考になる。――歌語としてはめづらしい「壁や窓」が京極派の歌材となることを凝視という点から論述され――

凝視して対象を分節するためには、その手がかりや枠組みが必要なのであって京極派があえて「壁」や「窓」を歌材として導入したのはそのためだったと考えられる（後略）

ここでの「対象」を「心情心理」に、「壁」や「窓」を「心の底」に置き換えれば、これはそのまま京極派の恋歌に適用される。「心の底」は京極派恋歌において心情心理を分節する、すなわち多元化する枠組みの一つともとらえられるのである。これをまた、京極派恋歌の抽象化の手法と関連させて一首全体の構成について述べるならば、京極派では、恋の心を抽象化してとらえ、その上で、その抽象化された心を時間の推移にそって整理する「多元化する」構成ということができるのであろう。

『玉葉集』における「心の底」と題しながら結局多くを恋歌の手法について語ることとなったが、それが京極派の手法として叙景歌についても通用することは、すでに述べた通りである。

またこの言葉にそって、京極派和歌の宗教的もしくは精神的側面が語られるべきであろうが、今はそれについやす多くの用意を持たない。京極派の時代と風土に対して持つ意味とともに、今後の勉強の課題として他日を期したい。

注

1 『伏見院御製の研究』（一九四三・人文書院）第四章第一節独特なる御表現の第一項から第三項に「色」「むらむら」「心」という語彙を掲げる。『永福門院』前篇第四章第四項第四類御語彙の項に「むらむら」「色」を掲げる。

2 『京極派歌人の研究』（一九七四・笠間書院）終章第一節玉葉風雅表現の特異性

3 『風雅集の基礎的研究』（一九八六・笠間書院）第三編四季部の構成と歌題の特質

4 「窓の周辺――京極派歌風の一面」（『芸文研究』第四十号・一九八四）

5 以下、勅撰和歌集の底本は『新編国歌大観』第一巻（一九八三・角川書店）による。また『〜和歌集』の「和歌」を略してしるす。

6 前掲・『京極派歌人の研究』終章第二節京極派歌人一覧

7 『中世和歌史の研究』（一九七二・角川書店）所収「京極派歌風の要点」

8 『金葉集』は二度本三奏本ともに○。

9 使用した『古今集』から『玉葉集』までの総索引は次の通りである。
古今集―西下経一・滝沢貞夫編・一九五八
後撰集―大阪女子大国文学研究室編・一九六五
拾遺集―片桐洋一編・一九八〇
後拾遺―集糸井通浩・渡辺輝道編・一九七六
金葉集―増田繁夫編・一九七六
詞花集―滝沢貞夫編・一九七二
千載集―編者同前・一九七六
また、『新古今集』以下『玉葉集』までの総索引はすべて滝沢貞夫氏編・明治書院版によった。

10 分類に際しては、大よそ次のようなところに注意を払った。句としての結びつきのつよいA・B型を最優先とした。具体的には、例えばA・C型が共存している「わたつみの底に沈める」のような場合は、「わたつみの底」をとりA型に分類。また句が重なる場合は区切れの位置によって所属を決めた。例えば「わたつみの底のもくず」は「底のもくず」でB型に分類する等である。各型についての細部に関しては、A型用語は「心の底」に関係の深い用語であることを考え、その「〜の底」の「〜」の部分を細かく分類表示した。B型用語では「そこの心」を分けて掲示した。この「そこ」はあなたの意をかけた懸詞である。Eには「そこの心」以外の懸詞――ほとんどが場所の其処をかけたもの――を掲げた。

11 『新編国歌大観　第二巻・私撰集編』（一九八四・角川書店）『同・第三巻私家集編Ⅰ』一九八五・角川書店）による。以下、私家集引用の歌およびその番号も同様である。

12 「かけ路」「かげ路」のどちらの意にもとれるが、どちらの意にとってもここでの当面の問題（修辞的な面からの）には、さしさわりがないと思われるので、ここでは一応「かけ路」としておく。

13 前掲岩松氏論文にいう「歌語世界の拡大をはかる」といった意味において。

14 「心の底」に関して、和歌以外での先行例として、漢語の「心底」という言葉を、仏教語にわたって調査してみたが和歌に先行する古い用例を捜しえなかった。釈教歌・神祇歌における「心の底」の使用も、和歌の修辞的用法から用いられている可能性が強いということができるであろう。

15 代名詞・疑問代名詞の類も抽象名詞の一類として表示した。「心」と「人」以外に名詞を全く用いていないものも、抽象名詞の部類に所属させた。

16 小稿「玉葉集恋歌の表現」（『三田國文』第三号・一九八五）

17 三代集以降の勅撰集では減少し続け、『新古今集』恋部の用例では懸詞を用いた一例を除いて見い出せなくなることがその一証となろう。

18 例えば遊義門院権大納言などがそれにあたる。彼女は為世の娘で歌人としては二条派に属すると考えられるが、遊義門院（伏見院の妹）は京極派の歌人である。その歌に遊義門院による京極派的影響を受けるもののあろうことは十分に考えられるのである。

19 前掲福田氏論文「京極派歌風の要点」

20 前掲岩松氏論文